

上川北部地域病診連携 の20年を振り返って

上川北部医師会 理事
岡崎内科 理事長・院長
岡崎 望

それは、一つの「不幸な出来事」から始まったのかもしれない。

超多忙な医療環境を背景にさまざまな要因が重なって生じた出来事であったが、これは当時、どのような医療機関でも起こりえた出来事だった。

その反響、衝撃は大きく、この事件をきっかけに事態は急速に動いていく。この後、看護教育の充実のため名寄市立短期大学看護科～名寄市立大学看護学部が設置され、同時に名寄市立病院の診療体制が見直されるばかりでなく、診療所・民間病院・各公的病院の間に急速に交流の活性化が図られることになる。

医師会（故中村会長）は直ちに市民にアンケート調査を行い、市民はプライマリケアを担当する民間診療所と2次医療担当の名寄市立病院の診療体制充実を渴望していた。平成3年秋、市立病院の医師と開業医が忌憚のない意見交換会を開催したのは必然であった。この会合を契機に平成4年1月14日、「名寄市病診連携協議会」が発足した。

まず、統一化した情報提供書を作成し双方向での情報の共有化、事務サイドでの保管を行い、必ず返書が返されるシステムを作成することから始まった。さらに、症例検討会の充実、院内勉強会や医師会主催の医学教育講演会を通して各自医療関係者のレベルアップを図り、その後の親睦会を通じて個々人の交流も活発化した。この動きは、消化器、呼吸器、循環器、泌尿器、漢方関連の自発的な研究会の拡大につながっていった。

また、名寄市立病院医誌の発行に、開業医の参加を通じて学術面での交流も活発化した。他方、病院主催や医師会長（吉田現会長）主催のゴルフ大会や各種行事の医療以外の交流も増加していった。これは、名寄市立病院が地域センター病院の指定以後、ソフト・ハード面での充実と相まって相乗効果で実現していった。

久保田市立病院院長（当時）は、平成9年、この会を拡大発展させる形で「名寄地域病診連携協議会」とし周辺地域にその範囲を広げた。この頃には、市立病院の医療機械の共同利用、データ解析の報告がなされるようになる。また、地域の保健医療への啓蒙活動（講演会など）も病診相互で活発化した。

病診連携の象徴的な紹介・逆紹介は平成5年3,534件であったのが、平成15年3,933件、平成20年8,776件、平成24年11,559件にまで拡大化した。これは、平成15年に佐古新院長（当時）の就任に伴い、この会が「上川北部地域病診連携協議会」と改変され、上川北部全地域を網羅することに起因する。

加えて、在宅診療への病診へのかかわり合いが、風連国保診療所松田医師（第1回赤ひげ大賞受賞）を中心に充実。また、国療名寄病院の民間委託によって名寄東病院（医師会委託運営）となり、市立病院の後方病院として、病診連携として慢性期医療を支えている。

平成25年5月、和泉新院長のもとでIT利用による遠隔医療ネットワークが始動する。当面、名寄市立病院、士別市立病院、稚内市立病院、枝幸国保病院の4ヵ所を連携する、テレビ会議や診断カンファレンスなどから開始される。将来は、管内のすべての医療機関をIT利用によりつなげる可能性がある。当地のように地理的ハンディのある地域では、高速道路の整備やドクターヘリの充実と並行して実現が必至の「病診連携」かもしれない。

こうして、20年を振り返るとあつという間の出来事であった。

今後の病診連携がどんなにIT利用により進んでも、結局、医療人各位の信頼、忍耐、共働の構築の上に継続発展して行かねば、「絵に描いた餅」で終わってしまう。われわれの初志貫徹は、これからもこの地域での不断の努力にかかっていると云えよう。

